

# 中国人日本語学習者の日本語文と中国語文における 事実文・意見文の峻別能力の比較

田 中 舞  
Mai Tanaka

## 1. はじめに

日本の大学や大学院といった高等教育機関で専門的な知識を身につけ、学位を取得することを目標に日本語を学ぶ外国人留学生にとって、レポートや論文等の文章を作成するためのアカデミック・ライティング能力は学業を遂行する上で必要不可欠な能力である。そのため、留学生の急激な増加が始まった2000年度以降、アカデミック・ライティングに関する研究も活発化し、現在までに様々な研究が行われている。しかし、アカデミック・ライティングに必要とされる能力は幅広く、多岐に渡るため、十分な研究成果が得られているとは言い難く、現在においてもさらなる研究が求められている。

そこで、田中（2010）では、アカデミック・ライティング能力の一つとされ、多くの文献によってその重要性を指摘されているにも関わらず、関連する調査や研究は少なく、未だ十分な研究がなされているとは言い難い事実と意見の書き分けに注目し、事実と意見を書き分けるための前提条件である事実文と意見文の峻別能力に関する調査を、中国人日本語学習者を対象とし、学習言語である日本語文において行った。その結果、学習者は、日本語では断定表現の場合は事実文を表すことが多く、文末にモダリティ表現を含む場合は意見文を表すことが多いという日本語の一般的な傾向を理解していること、また、日本語の一般的傾向と一致している文であっても、中国人日本語学習者にとっては、事実文と意見文の峻別が困難な表現が存在することが明らかになった。さらに、学習者の峻別能力が上昇しても正答率が上がらず、自然に峻別ができるようになるとは言えない表現が存在することも判明した。

以上の研究結果を踏まえ、本研究では、学習者が母語である中国語において、どのような事実文と意見文の峻別能力を有しているのかを調査し、学習言語である日本語文における事実文と意見文の峻別能力との比較を行い、その違いを明らかにする。

## 2. 研究目的

本研究では、中国人日本語学習者の母語である中国語と、学習言語である日本語における事実文と意見文の峻別能力違いを明らかにすることを目的とする。そのため、リサーチ・クエスションは、以下の3点とする。

- (1) 母語である中国語と、学習言語である日本語では、峻別の難易度が異なるのか。
- (2) 母語である中国語においても、学習言語である日本語において峻別が困難であった項目は峻別が難しく、容易であった項目は易しいのか。
- (3) 母語である中国語においても、学習言語である日本語における峻別状況と同様に、峻別能力が上がっても、峻別が困難な項目が存在するのか。

これらの疑問点を解明するため、本調査では、母語である中国語を用いたテストと、学習言語である日本語を用いたテストの結果を比較する。

### 3. 事実文と意見文の定義

本調査における日本語文の事実文と意見文の定義づけは、田中（2010）と同様に木下（1990）の定義を基に行う。木下によれば、事実文とは、

(a) 自然に起こる事象（某日某地における落雷）や自然法則（慣性の法則）；過去に起こった、またはいま起こりつつある、人間の関与する事件の記述で、

(b) しかるべきテストや調査によって真偽（それがほんとうであるかどうか）を客観的に判定できるものである。つまり、事実文においてはその文の内容の真偽を追跡調査によって客観的に確認する事が可能である限り、記述内容の真偽は問われない。さらに、伝聞や引用に関しても、記述媒体だけでなく、インターネットやテレビなどのメディア媒体からの情報使用であったとしても、困難度に相違はあるにせよ、追跡調査による客観的な真偽判断が可能であるため、事実文に含まれる。また、佐藤（1994）が述べるように、事実文は原則的に「～だ」「～である」といった断定の形を取るが、石黒（2004）の指摘にもあるように、日本語では断定表現の場合、事実文と考えられる場合と、意見文と考えられる場合がある。そのため、本研究では、事実文の判定基準として、追跡調査による客観的な真偽判断の可否とともに、石黒が用いた異論の想定可否を採用し、事実文とは、追跡調査によって記述内容についての客観的な真偽判断が可能であり、その記述に対して異論が想定できない文であるとする。

事実文に対して、意見文とは、書き手の考えを述べた文を指す。そのため、事実文とは異なり、追跡調査による記述内容についての客観的な真偽判断の必要はない。また、書き手の個人的な考えについての記述であるため、他者の考えと同じである必要もない。よって、本研究では事実文の定義に合わせ、意見文とは、書き手の考えを述べた文を指し、記述内容についての客観的な真偽判断が不可能であり、その記述に対して異論が想定できる文であるとする。

### 4. 調査方法

提示された1文が、事実を表す事実文であるか、意見を表す意見文であるかを判断する二者択一式の調査をテスト形式で実施した。まず初めに日本語文における調査を行い、その後約1ヶ月の期間において中国語文における調査を行った。どちらの調査においても制限時間の設定は行わなかったが、全調査対象者から概ね5分で回答を得られた。

### 5. 調査項目

本調査で用いた日本語文における調査項目は田中（2010）と同じものである。よって、調査項目で用いられる日本語文は、調査対象者の日本語に対する能力差要因を取り除くために、全ての調査対象者が文の意味内容を理解できるよう、日本留学試験における記述問題テーマ出題時に使用される「べきだ」(日本語能力試験2級レベル)以外は、日本語能力試験3、4級レベルの文型・文法を用いて作成されている。項目数は、事実文10項目、意見文10項目の合計20項目である。

また、それぞれの項目には、事実文及び意見文の定義を基に、事実文には伝聞を表す2項目を含む客観的な真偽判断が可能な文が、意見文には客観的な真偽判断ができず異論が想定される文が含まれている。客観的な真偽判断

とともに異論の想定可否から事実文と意見文の峻別を行わなければならない断定表現に関しては、事実文、意見文それぞれに動詞、イ形容詞、ナ形容詞を用いた項目があり、意見文には、文末にモダリティ形式がつく場合が多いとの石黒（2004）の指摘、および井下（2002）が事実文と意見文の判断に関して行った研究から得た「文末の語尾に注目して判断している」という調査対象者からの報告を参考に、文末にモダリティ形式を含む項目が7項目含まれている。次の図表1. が日本語文の全調査項目である。

図表 1. 調査項目(日本語文)

項目番号	項目文	解答	異論の想定	文末
1	奈良の法隆寺は、7世紀初めに聖徳太子によって建てられた。	事実文		断定(動詞)
2	新しい法律ができたので、交通事故は減少するだろう。	意見文	可	モダリティ
3	地球の環境を守るためには、個人の努力が必要だ。	意見文	可	断定(ナ形容詞)
4	スミスさんは顔を赤くして、手を振り上げながら大きな声で怒鳴った。	事実文		断定(動詞)
5	山田太郎氏(61)によれば、現在ある専門家のチームが新しい薬を開発しているという。	事実文		モダリティ(伝聞)
6	小学生や中学生が携帯電話を持つべきではない。	意見文	可	モダリティ
7	日本では、東京都の人口が一番多い。	事実文		断定(イ形容詞)
8	このまま少子化が続いたら、人類は滅亡するかもしれない。	意見文	可	モダリティ
9	週末は仕事が休みなので、庭の畑で野菜を作っている。	事実文		ている形
10	今の世の中には非常識な人が多い。	意見文	可	断定(イ形容詞)
11	外国で生活する場合、その国の習慣に従わなければならない。	意見文	可	モダリティ
12	面接時、コミュニケーション能力を重視する会社が増えているようだ。	意見文	可	モダリティ
13	この道をまっすぐ行って、2つ目の信号を右に曲がると、映画館がある。	事実文		断定(動詞)
14	地球上には、500万種以上もの生物が存在している。	事実文		ている形
15	外国語の勉強には、毎日努力を続けることが大切だと思う。	意見文	可	モダリティ
16	フランスのルーブル美術館から京都国立美術館へゴッホの「ひまわり」が届けられた。	事実文		断定(動詞)
17	かぜを引いたときは、早く寝たほうがいい。	意見文	可	モダリティ
18	市民図書館で本を借りるときは、身分証明書が必要だ。	事実文		断定(ナ形容詞)
19	天気予報によれば、明日は一日中いい天気だそうだ。	事実文		モダリティ(伝聞)
20	今日の夕日はとてもきれいだから、明日は絶対晴れる。	意見文	可	断定(動詞)

中国語文に関しては、日本語文を中国語文に翻訳したものを使用する。翻訳方法は、まず、中国人中日翻訳の専門家と中国人日本語教師に、日本語文の調査項目を中国語に翻訳することを依頼した。その後、中国語に翻訳された調査項目を別の中国人中日翻訳の専門家に再度、日本語に翻訳することを依頼し、元の日本語文の調査項目と意味、表現が同じになった中国語文を調査項目文として採用し、使用した。次の図表2. が中国語文の全調査項目である。

図表 2. 調査項目(中国語文)

項目番号	項目文
項目 1	奈良の法隆寺于7世纪初由圣德太子下令兴建。
項目 2	新法律出台，交通事故应该会有所减少。
項目 3	保护地球环境，需要每个人的努力。
項目 4	史密斯满脸通红，一边挥手一边大声怒喝。
項目 5	据山田太郎氏(61)称，目前某专家队伍正在研发新药。
項目 6	小学生和初中生不应携带手机。
項目 7	在日本，东京都的人口最多。
項目 8	如果低出生率现象持续，人类可能会灭亡。
項目 9	周末休息，在院子的田里种蔬菜。
項目 10	当今世上有很多没有常识的人。
項目 11	在外国生活必须入乡随俗。
項目 12	似乎越来越多的公司在面试时都很重视沟通能力。
項目 13	沿着这条路一直走，在第二个交通灯之处右转，就是电影院。
項目 14	地球上500万种以上的生物。
項目 15	我认为学习外语，每天不懈努力是很重要的。
項目 16	凡高的《向日葵》从法国罗浮宫美术馆运到了京都国立美术馆。
項目 17	患上感冒时应该早点睡觉。
項目 18	在市民图书馆借书时需要出示证明身份的证件。
項目 19	天气预报说，明天一天都是晴天。
項目 20	今天的夕阳特别美，明天绝对是晴天。

## 6. 調査対象者

調査対象者は、田中(2010)における対象者と同じであり、日本国内の専修学校に在籍し、日本の大学及び大学院への進学を目標に日本語を学ぶ20代の中国語を母語とする日本語学習者である。来日後、1年から3年が経過しており、全調査対象者が初級日本語学習を修了し、日本語文の調査項目で用いられた文型・文法を理解することができる日本語能力検定試験3級レベル以上の日本語運用能力を有している。本調査では、日本語文を対象とした調査と中国語文を対象とした調査の2度の調査の両方に参加した79名を調査対象者とする。

## 7. 分析方法

本調査では、学習者の母語である中国語文及び学習言語である日本語文における各調査項目の難易度と、調査対象者の中国語文及び日本語文におけるそれぞれの峻別能力の比較を行うために、古典的テスト理論と現代テスト理

論の2つの理論を用いて分析を行う。古典的テスト理論とは、正答数を基に分析を行う手法であり、田中（2010）でも用いられた分析手法である。そのため、田中（2010）によって得られた分析結果との比較を容易にするため、本調査でも、まず、同じ分析手法である古典的テスト理論を用いて分析を行う。しかし、本調査では学習言語である日本語における事実文と意見文の峻別能力と、母語である中国語文における事実文と意見文の峻別能力という異なる2つの能力を比較する。そのため、古典的テスト理論とともに、テストと受験者を切り離し、それぞれの調査における調査対象者の能力推定値と項目困難度を測定することが可能となる現代テスト理論を用いることによって、より正確に、2つの異なる調査の結果の比較を行うこととする。以下ではまず、古典的テスト理論と現代テスト理論についての概要を述べる。

## 7.1 古典的テスト理論

古典的テスト理論とは、従来使用されてきた分析手法を指し、新しいテスト理論と区別するために用いられるようになった用語である。古典的テスト理論を用いた分析では、素点や得点が用いられ、それらを基に標準得点や標準偏差、正答率や弁別指数などの算出が行われる。受験者間における順位づけ等の能力差を測定するためには有効な方法ではあるが、テストと受験者の関連性が非常に強く、テストと受験者を切り離せないという問題が存在する。

例えば、同じテストを能力が高いグループと能力が低いグループの2つのグループが受験した場合、1つ目のグループが受けたテストの平均点は高くなり、2つ目のグループが受けたテストの平均点は低くなるだろう。一般的に、平均点が高いテストは簡単なテストであり、平均点の低いテストは難しいテストであると考えられるが、2つのグループが受けたテストは同じであるため、この結果から、実際にこのテストが簡単なのか難しいのかを判定することは不可能である。反対に、同じ人物が2つの異なるテストを受けた結果、1つ目のテストが10点で、2つ目のテストが90点であった場合、この受験者は1つ目のテスト結果からは能力が低いと判定され、2つ目のテスト結果からは能力が高いと判定されると考えられるが、能力が低いと判定された受験者も、能力が高いと判定された受験者も同じ一人の人物であり、どちらの判定が正しいのか分からない。

また、古典的テスト理論で用いられる素点や得点は、分析を行う際に間隔尺度として取り扱われているが、長さや重さで用いられる間隔尺度における0は、本来「無」を意味する。しかし、テストの素点や得点が0であったとしても、その受験者の能力が全くないとは言えない。例えば、実用英語技能検定1級のテストを受けた受験者の得点が0点であったとしても、この受験者が“hello”や“thank you”を知っていたなら、この受験者の英語能力は「無」とは言えないだろう。さらに、間隔尺度では、10と20の間と80と90の間は同じであると考えられるが、テストの結果の場合、10点と20点の差が80点と90点の差と全く同じだと言えるだろうか。実際に、小学校、中学校、高等学校と学校教育の中でテストを受けてきた人物であれば、10点を20点にする努力と、80点を90点にする努力が同じだとは感じないはずである。

以上のような問題点を克服するために考えられ始めたのが、新しいテスト理論であり、現代テスト理論である。

## 7.2 現代テスト理論

現代テスト理論とは、古典的テスト理論が抱えるテストと受験者が切り離せないという問題点や、順序尺度である得点を間隔尺度として取り扱うことに対して疑問が残るといった問題点を改善することを目的に考えられ始めた新しいテスト理論を指し、古典的テスト理論と区別するために用いられるようになった用語である。一般的には、項目応答理論を指すが、ラッシュ測定理論やS-P表理論等も含まれる。



現代テスト理論は、古典的テスト理論における問題点を克服することを目的として考えられた理論であることから、現代テスト理論を用いた分析手法を使用すれば、テストと受験者を切り離せないという問題点と、順序尺度である素点や得点を間隔尺度として取り扱うことの問題点を改善することができる。そのため、現代テスト理論を用いた分析を使用すれば、異なる2つ以上のテスト結果の比較が容易になる。そこで、本研究では、現代テスト理論を用いた分析手法の一つであるラッシュ・モデルを使用し、調査対象者の母語である中国語文における分析結果と、学習言語である日本語文における分析結果を比較することとする。

### 7.3 ラッシュ・モデル

ラッシュ・モデルとは、現代テスト理論を用いた分析手法の一つであり、1960年に、George Raschによって発表されたモデルである。ラッシュ・モデルは、古典的テスト理論の限界を克服するためには、言語テストにおいても、いつ、誰が受けても難易度が変化しない間隔尺度上の値が提示される測定器が必要であるとの考えから生み出された。そのため、ラッシュ・モデルを用いると、受験者の能力値と項目の困難度を推定することが可能になる。この時、調査対象者と調査項目は切り離されるため、能力推定値も、困難度推定値も一定の数値として取り扱うことが可能になる。つまり、受験者の能力推定値は、テストの難易度に左右されることがなくなり、テストの項目難易度も、受験者の能力に左右されなくなる。なお、これらの推定値は、ラッシュ・モデルでは、logitsと呼ばれる間隔尺度の単位で提示される。

また、ラッシュ・モデルを用いると、受験者の能力と項目難易度から、テスト項目の正答確率を求めることが可能となる。例えば、能力推定値と困難度推定値が等しい時、このテスト項目の正答率は50%となり、項目困難度に対して能力推定値が高ければ、正答確率は上がり、能力推定値が低ければ、正答確率は下がる。この関係を表したものが、項目特性曲線である。

ラッシュ・モデルは、テストの結果から、受験者の一つの能力を測定しようとするモデルである。そのため、モデルでは、一つの調査項目に対して、能力推定値の低い受験者の正答確率は低く、能力推定値の高い受験者の正答確率は高くなることが求められる。よって、分析データが、どの程度このモデルに適合しているかが重要になる。もちろん、人間が関わるデータであるため、モデルに完全に適合することは、不可能であるが、この適合の程度を確認するために行われるのが、適合度分析である。適合度分析では、分析データがどの程度ラッシュ・モデルに適合しているかが測定され、外れ値の影響を抑えた値であるインフィット平方平均、外れ値に敏感な値であるアウトフィット平方平均、平方平均にWilson-Hilferty変換を加えた値であるインフィット $t$ 、及びアウトフィット $t$ を用いて表示される。適合値と認められる範囲は、静(2007)によれば、infit / outfitが0.5 ~ 1.5、infit  $t$  / outfit  $t$ が-2.00 ~ +2.00であるが、現在までに、絶対的な許容範囲は決定されていない。また、infit / outfitに関しては、通常、数値が許容範囲より下に外れている場合には問題とされない。なお、適合度分析により、許容範囲から外れたデータは、モデルに不適合であると見なされ、データから削除される。

## 8. 調査の結果と考察

調査の結果と考察は、分析で用いた理論ごとに述べる。まず、古典的テスト理論を用いた分析結果と考察を、次に、現代テスト理論を用いた分析結果と考察を記述する。最後に、両方の分析結果を包括した結果の報告と考察を行う。

### 8.1 古典的テスト理論を用いた分析結果と考察

古典的テスト理論とは、素点や得点を使用して行う、従来用いられてきた分析手法を指す。本研究では、正答数を基に分析を行うこととする。

まず初めに、田中（2010）に参加した日本語学習者は126名であったが、その後の中国語文を対象とした本調査に参加した者は79名となり、その差が大きくなったため、田中（2010）で得られた結果と、本調査で用いるデータの結果に差異がないかを確認する。以下の図表3.が、田中（2010）で得られた結果（＝調査1）と本調査で使用する79名分のデータ（＝調査2）の項目別正答率である。

**図表 3. 田中(2010)(=調査 1)と本調査(=調査 2)における日本語文の項目別正答率**

項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
調査1	92.9	67.5	70.6	84.9	75.4	88.9	92.1	70.6	61.9	23.0	62.7	38.1	79.4	92.1	84.1	81.7	88.9	90.5	50.0	84.9
調査2	92.4	75.9	65.8	83.5	75.9	89.9	92.4	74.7	64.6	24.1	65.8	40.5	78.5	93.7	86.1	83.5	87.3	87.3	55.7	86.6

この結果を基に、F検定を行ったところ、2つのデータの分散の違いは見られず ( $p \geq 0.05$ )、分散は等しいことが確認された。そのため、等分散を仮定したt検定を用いた比較を行った。その結果、2つのデータの違いは見られず ( $p \geq 0.05$ )、田中（2010）で得られた結果と、本調査で使用するデータは、同等であることが確認できた。よって、本調査では、日本語文に関しても、日本語文と中国語文の両方の調査に参加した79名のデータのみを用いることとした。

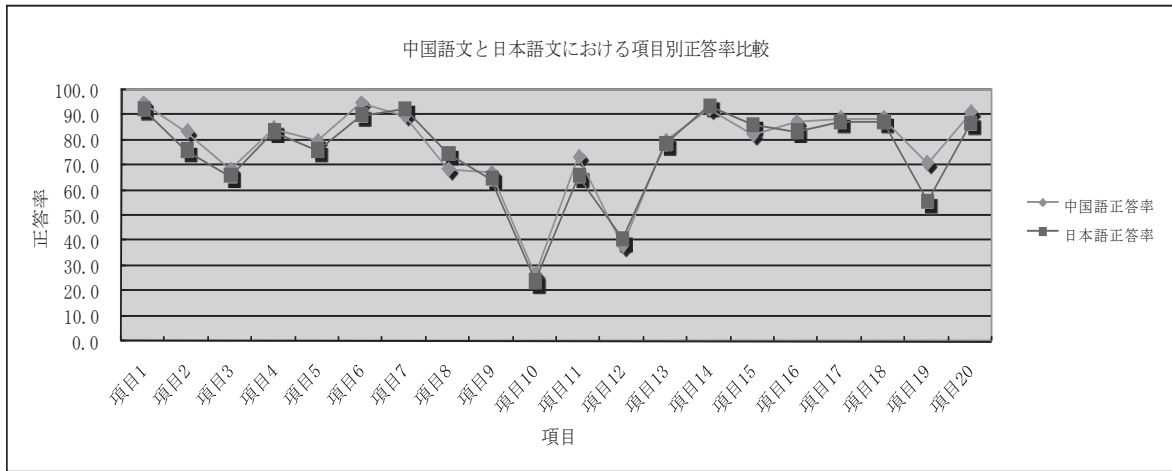
次に、本調査対象者79名分のデータを分析し、中国語文と日本語文における正答率を求めたところ、中国語文における全体の正答率は77.53%、日本語文における全体の正答率は75.32%となり、母語である中国語のほうが、学習言語である日本語よりも正答率が高いという結果が表れ、学習言語である日本語文よりも、母語である中国語文を用いた項目の方が、峻別が容易であったと推測できる。

また、中国語文及び日本語文における項目別の全体正答率は、以下の図表4.の通りとなった。中国語文における項目別の正答率は26.6%から94.9%となり、最も正答率が低く難易度が高かった項目は項目10であり、最も正答率が高く困難度が低かった項目は項目1と項目6の2つであった。この結果を基に、中国語文における各項目の正答率と日本語文における各項目の正答率の相関係数を求めたところ、相関係数は0.967と非常に高く、強い相関が見られ、中国語文で峻別が困難な項目は日本語文でも難しく、中国語文で峻別が容易な項目は日本語文でも易しいということが明らかになった。

**図表 4. 中国語文及び日本語文における項目別正答率**

項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
中国語正答率	94.9	83.5	68.4	84.8	79.7	94.9	89.9	68.4	67.1	26.6	73.4	38.0	79.7	92.4	82.3	87.3	88.6	88.6	70.9	91.1
日本語正答率	92.4	75.9	65.8	83.5	75.9	89.9	92.4	74.7	64.6	24.1	65.8	40.5	78.5	93.7	86.1	83.5	87.3	87.3	55.7	86.6

図表 5. 中国語文と日本語文における項目別正答率比較グラフ



次に、正答数から調査対象者を上位群、下位群に分類し、各項目における正答率の測定およびt検定による上位群と下位群の比較を行った。結果は、以下の図表6.の通りである。t検定の結果から、中国語文においては項目10に、日本語文においては項目10と12に上位群と下位群の間に有意差が認められず ( $p \geq 0.05$ )、事実文と意見文の峻別能力が上昇しても、正答確率が上がらない項目であることがわかった。この結果から、中国語文の項目10、及び日本語文の項目10と12に関しては、事実文と意見文の峻別能力が上昇しても、自然に峻別が行えるようにはならないことが予測され、指導に当たっては、注意が必要な表現であると考えられる。なお、上位群、下位群の分類に関しては高橋(2002)に従い、上位27%、下位27%を基準に、同一正答数保持者を含め最も27%に近くなる人数での分けを行った。

図表 6. 中国語文及び日本語文における上位群下位群別項目別正答率とt検定結果

項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
中国語正答率	上位群	100.0	100.0	87.5	100.0	95.8	100.0	95.8	91.7	95.8	37.5	95.8	70.8	100.0	95.8	100.0	100.0	100.0	95.8	100.0	100.0
	下位群	82.6	60.9	43.5	60.9	60.9	82.6	73.9	52.2	26.1	26.1	39.1	13.0	47.8	78.3	43.5	60.9	60.9	73.9	39.1	78.3
	t検定	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.02	0.00	0.00	0.21	0.00	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.02	0.00	0.01
日本語正答率	上位群	100.0	89.5	100.0	94.7	100.0	100.0	100.0	94.7	84.2	31.6	100.0	47.4	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	下位群	77.3	59.1	27.3	45.5	54.5	77.3	77.3	54.5	40.9	22.7	36.4	27.3	36.4	86.4	50.0	50.0	63.6	72.7	40.9	72.7
	t検定	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.27	0.00	0.10	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	0.01



さらに、各調査対象者の母語である中国語文における正答数と、学習言語である日本語文における正答数から、相関係数を求めたところ、相関係数は、0.74 となり、強い相関が認められた。この結果から、中国語文において事実文と意見文に対する峻別能力が高い者は、日本語文においても峻別能力が高く、中国語文において峻別能力が低い者は、日本語文においても峻別能力が低いということがわかる。

## 8.2 現代テスト理論を用いた分析結果と考察

次に、現代テスト理論を用いた分析手法の一つである、ラッシュ・モデルを用いて分析を行う。前述のように、ラッシュモデルでは、調査項目の難易度と調査対象者の能力値が測定され、間隔尺度上の値として提示される。同時に、調査項目と調査対象者は切り離されるため、項目難易度も能力値も常に一定の数値として扱うことが可能になり、2つ以上のテスト結果の比較が容易になる。また、ラッシュモデルでは、分析データがモデルに適合しているかどうかを確認するための適合度分析が行われ、不適合とみなされた項目や対象者は削除される。本研究では、田中（2010）で得られた結果から、峻別能力が上昇しても、正答確率が上がらない項目が存在することが予想されるため、許容範囲は、緩めに設定することとし、infit/outfit の値が 1.5 以上で、infit t/outfit t の値が  $\pm 2.00$  の範囲外である調査対象者をモデル不適合とみなし、データから削除した。

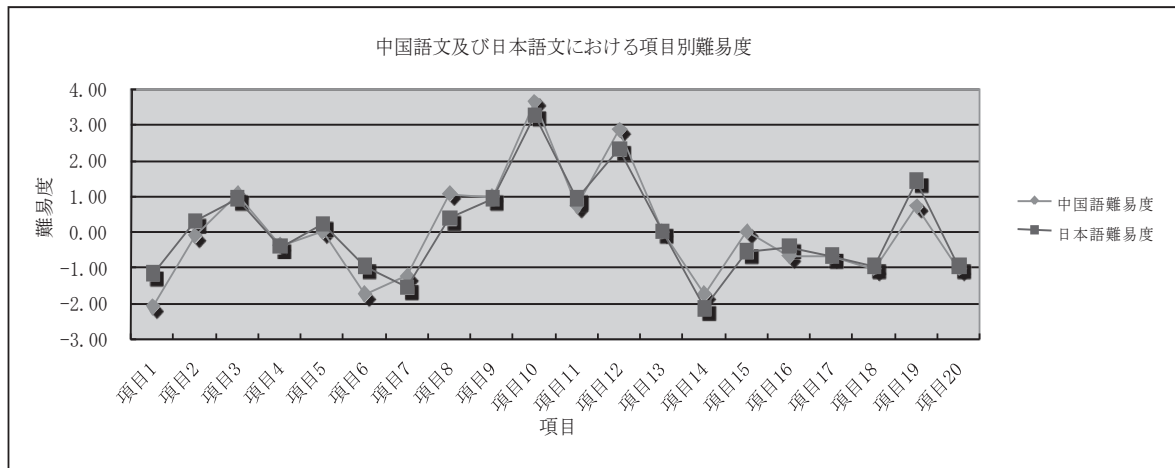
分析の結果、中国語文において、困難度推定値が最も高かった項目は、項目 10 の 3.63 であり、困難度推定値が最も低かった項目は、項目 1 の -2.10 であった。日本語文において、困難度推定値が最も高かった項目も、項目 10 であり、その値は 3.26 であった。また、困難度推定値が最も低かった項目は、項目 14 で、推定値は -2.14 であった。以下の図表 7. が、それぞれの言語における項目別難易度である。

この結果を基に、中国語文における項目別困難度推定値と日本語文における項目別困難度推定値の相関係数を求めたところ、相関係数は 0.955 と非常に高く、強い相関が見られた。この結果から、中国語文において事実文と意見文の峻別が難しい項目は、日本語文においても難しく、中国語文において峻別が易しい項目は、日本語文においても易しいということが、明らかになった。

図表 7. 中国語文及び日本語文における項目別困難度推定値

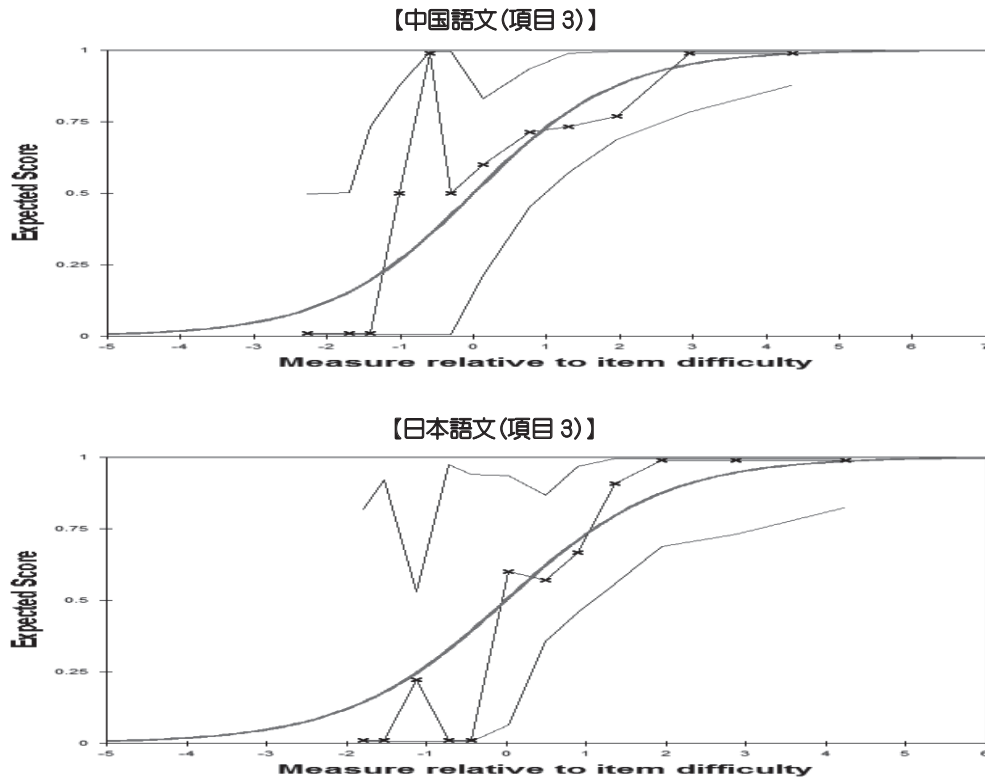
項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
中国語難易度	-2.10	-0.13	1.05	-0.40	-0.01	-1.76	-1.25	1.05	0.97	3.63	0.70	2.84	-0.01	-1.76	-0.01	-0.70	-0.70	-1.05	0.70	-1.05
日本語難易度	-1.18	0.28	0.92	-0.43	0.19	-0.98	-1.56	0.36	0.92	3.26	0.92	2.30	0.00	-2.14	-0.56	-0.43	-0.69	-0.98	1.41	-0.98

図表 8. 中国語文と日本語文における項目別難易度比較グラフ

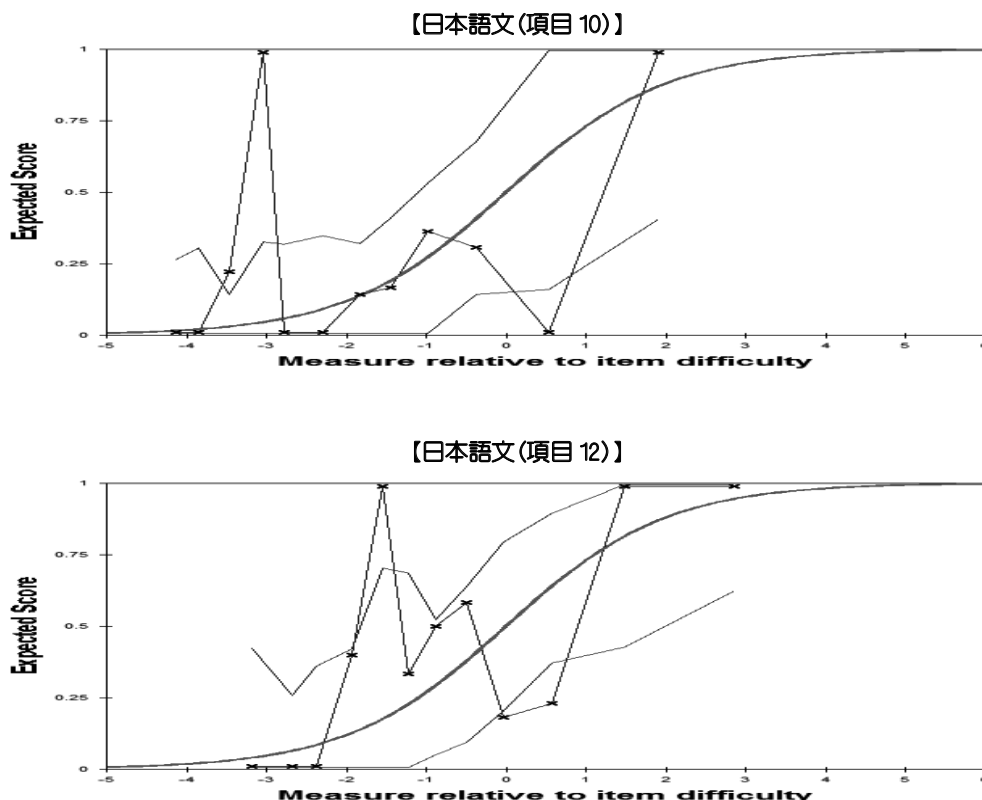


次に、各項目における、調査対象者の事実文と意見文に対する峻別能力に応じた正答確率の状況を確認するため、中国語文と日本語文における各項目の項目特性曲線の比較を行った。項目特性曲線とは、調査対象者の能力値と正答確率の関係を項目ごとに表したものであり、横軸が対象者の能力値を、縦軸が正答確率を表示している。その結果、中国語文においては、全ての項目で、能力値の上昇とともに、正答確率も上がっており、事実文と意見文に対する峻別能力が上がれば、どの項目で用いられた表現であっても、峻別が可能になることが、推測できた。しかし、日本語文においては、項目 10 と項目 12 では、モデルが示す許容範囲から項目特定曲線が外れており、能力値の上昇と、正答確率に関連性が見られなかった。この結果から、日本語文では、項目 10 と項目 12 で用いられた表現に

図表 9. 中国語文及び日本語文の項目において、能力値の上昇とともに正答確率の上昇が見られた項目



図表 10. 日本語文の項目において、能力値と正答確率に関連性が見られなかった項目



関しては、事実文と意見文に対する峻別能力が上昇しても、自然に峻別ができるようになる表現ではないことが予測される。その他の項目に関しては、中国語文における項目と同様に、能力の上昇とともに、正答確率が上がっており、事実文と意見文に対する峻別能力が上がれば、ある程度自然に峻別が行える表現であると考えられる。

また、調査対象者の中国語文における能力推定値と、日本語文における能力推定値の相関係数を求めたところ、0.612 となり、強い相関が認められた。この結果から、中国語文において事実文と意見文に対する峻別能力が高い者は、日本語文においても能力が高く、中国語文においての峻別能力が低い者は、日本語文においても能力が低いことが明らかになった。

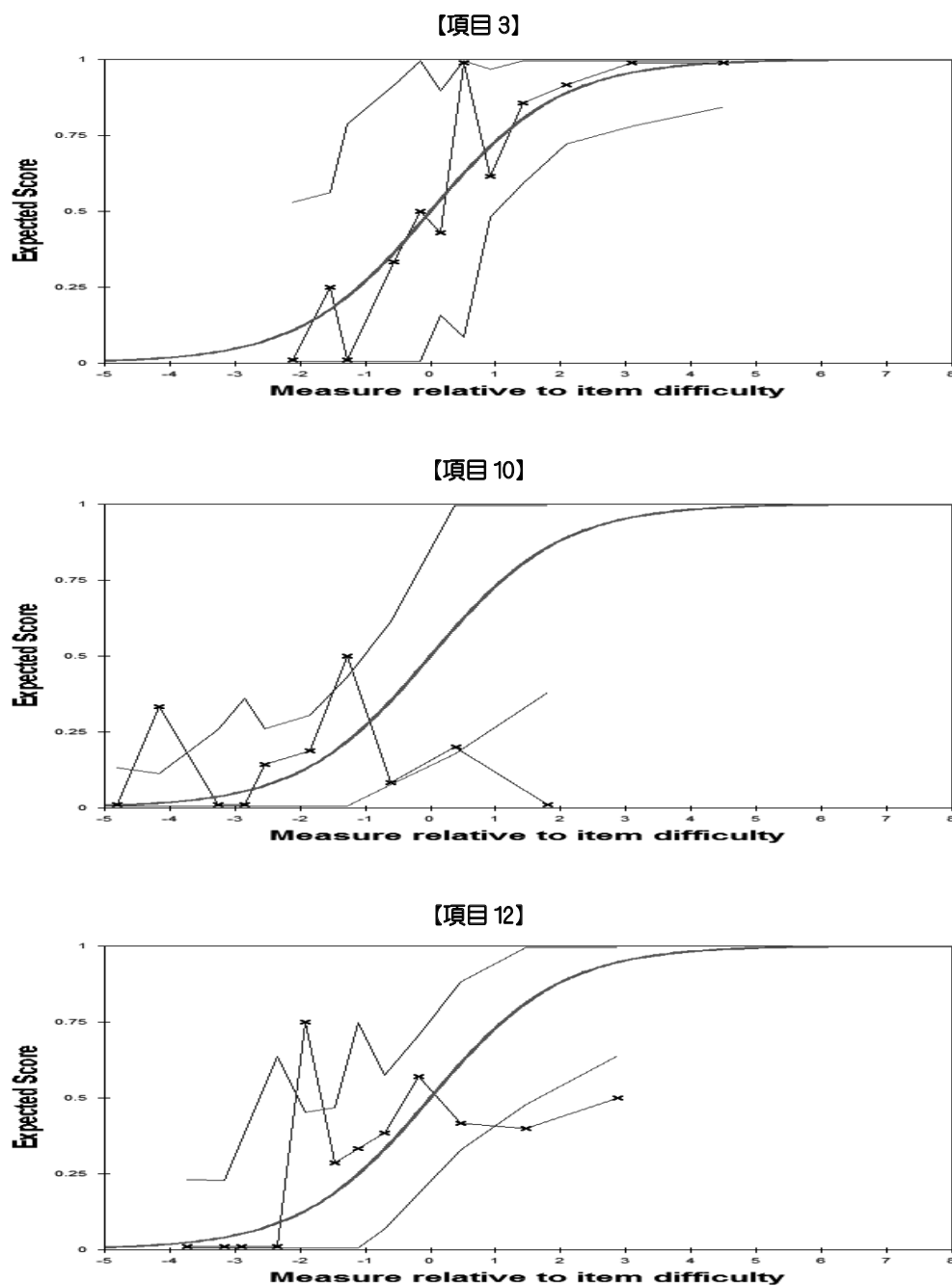
そこで、母語である中国語における調査対象者の能力値を固定し、日本語文における項目難易度の推定値を求めたところ、各項目の項目難度推定値は以下のようになった。

図表 11. 中国語文における調査対象者の能力推定値固定時の日本語文における項目別困難度推定値

項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
日本語難易度	-0.24	0.53	0.91	-0.61	0.43	-1.18	-2.50	0.63	1.09	3.61	0.82	2.53	-0.04	-2.50	-0.61	-0.61	-0.78	-0.78	1.35	-1.18

この結果を用い、中国語文における項目別困難度推定値との相関係数を求めたところ、相関係数は、0.953 と非常に高く、強い相関が見られ、調査対象者の能力推定値を固定した場合でも、母語である中国語文で峻別が困難な項目は学習言語である日本語文でも難しいということが明らかになった。また、各項目における項目特性曲線からも、これまでの分析とほぼ同様の結果が得られ、項目 10 と項目 12 においてのみ、能力推定値と正答確率に関連性が見られず、事実文と意見文に対する峻別能力が上昇しても、正しく峻別が行えるようにはならない表現を含む項目であることが確認された。

図表 12. 中国語文における調査対象者の能力推定値固定時の日本語文における項目特性曲線



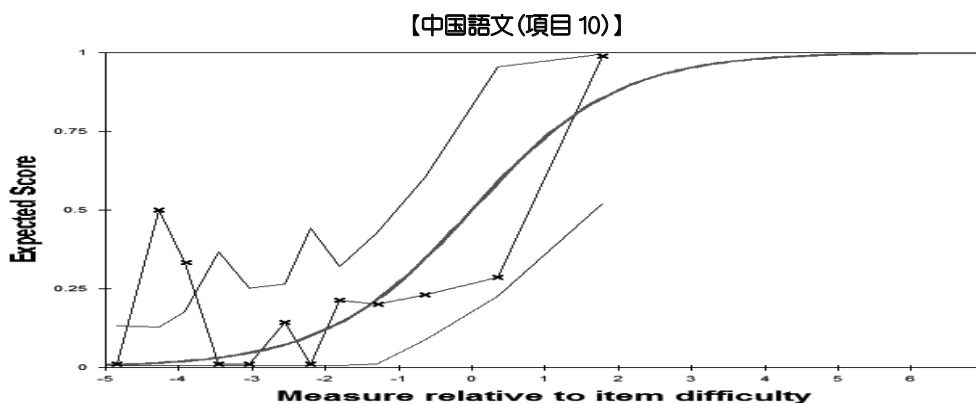
### 8.3 結果のまとめと考察

古典的テスト理論と現代テスト理論の2つの理論に基づく手法を用いて分析を行った結果、どちらの分析結果からも、母語である中国語文において事実文と意見文の峻別が困難であった項目は、学習言語である日本語においても峻別が難しい項目であり、中国語文において事実文と意見文の峻別が容易な項目は、日本語文においても峻別が易しい項目であることが、明らかになった。また、調査対象者の事実文と意見文に対する峻別能力に関しても、中国語文における峻別能力と、日本語文における峻別能力には、強い関連性があり、母語である中国語文において峻別能力が高い者は、学習言語である日本語においても峻別能力が高く、中国語において峻別能力が低い者は、日本語文においても峻別能力が低いことも明らかになった。しかし、どちらの分析結果からも、学習言語である日本語文においては、事実文と意見文に対する峻別能力が上昇しても、正答率や正答確率が上がらない項目が含まれていることも明らかになっている。この結果から、学習者が、学習言語である日本語文において事実文と意見文の峻別を行う場合、母語である中国語文において峻別を行う際に用いている方法を、そのまま用いることができない表現が含まれていることが推測できる。そのため、日本語文においては、どのような場合に事実を表す事実文となり、どのような場合に意見を表す意見文となるのかについての指導を行う必要があると思われる。

また、古典的テスト理論に基づいて行った分析と、現代テスト理論に基づいて行った分析からは、異なる結果も表れた。古典的テスト理論に基づいた分析を行った結果、学習言語である日本語文と同様、母語である中国語文においても、項目10に関しては、上位群と下位群の正答率に有為差が見られず ( $p \geq 0.05$ )、能力が上昇しても、正答率が上がらない項目であることが明らかになった。しかし、現代テスト理論に基づいた分析を行った結果、母語である中国語文においては、全ての項目で、能力値と正答確率に関連性が見られ、どの項目で用いられた表現に対しても、事実文と意見文に対する峻別能力が上昇すれば、ある程度自然に峻別が行えるようになるとの推察を行うことができた。

この分析結果の相違は、本調査が、提示された一文が事実文か意見文かを判断する二肢択一式のテストであったことが、原因だと思われる。中国語文における項目10の項目特性曲線を確認すると、能力推定値が非常に低い調査対象者の正答確率は高くなっているが、その他の調査対象者に関しては、能力推定値の上昇とともに正答確率も高くなるという状況が確認できる。この結果から、ある程度の峻別能力を保持していれば、項目10で用いられた表現に対しても、能力の伸びとともに、峻別が行えるようになるということがわかる。能力推定値が非常に低かった調査対象者は、提示された文が、事実文であるのか、意見文であるのかが、全く分からなかったため、適当に答えを選んだのであろう。今回の調査では、選択肢は、事実文と意見文の2つだけであり、適当に選択しても、50%

図表 13. 項目特性曲線





の確率で正解できる。その結果、提示された文が、事実文であるのか意見文であるのかが全くわからなくとも正しい答えを選択できた者が、予想外に多かったと考えられる。古典的テスト理論に基づき、正答数をもとに比較を行う方法では、上位群と下位群による比較を行うが、その際、この能力推定値の非常に低い、下位群に含まれる調査対象者の正答数が原因となり、上位群と下位群に有意差が現れなかったと推測される。

## 9. まとめと今後の課題

本研究では、中国人日本語学習者が有している事実文と意見文に対する峻別能力について、母語である中国語を用いた文と、学習言語である日本語を用いた文を対象に調査を行った。その結果、母語である中国語を用いた文を峻別する方が、学習言語である日本語を用いた文を峻別するよりも、容易であることが明らかになった。また、中国語文において事実文と意見文の峻別が困難な表現は、日本語文においても峻別は難しく、中国語文において峻別が容易な表現は、日本語文においても峻別が易しいということも明らかになった。さらに、中国語文において事実文と意見文の峻別能力が高い者は、日本語文においても峻別能力が高く、中国語文において峻別能力が低い者は、日本語文においても峻別能力が低いことも証明された。この結果から、事実文と意見文に対する峻別能力は、母語における能力が、学習言語においても転移すると考えられる。

しかし、母語を用いた文を峻別するよりも、学習言語を用いた文を峻別する方が困難であることから、学習言語である日本語文において峻別を行う際には、何らかの注意が必要であることは明らかである。日本語文における峻別の方が困難になる原因は、中国語文で用いられた全ての表現が、事実文と意見文に対する峻別能力が上昇すれば、正答確率が上がるものだったのに対して、日本語文で用いられた表現には、峻別能力が上昇しても、正答確率が上がらないものが含まれていたことから推測することができる。つまり、調査対象者は母語における能力を学習言語でも活用しているが、学習言語である日本語文には、母語である中国語文において峻別を行う際に使用している法則が、当てはまらない表現が含まれているといえる。この結果から、中国語母語話者である日本語学習者には、日本語の表現では、どのような文が事実文となり、意見文となるのかについての指導が必要であると思われる。

ただし、本調査で用いた調査項目は、20項目と少ない。そのため、今回、調査で用いた表現に対して、母語であれば、峻別能力の上昇とともに、正答確率が上がったからと言って、他の表現に対しても、同じ結果が表れるとは限らない。また、日本語文に関しても、母語における能力が活用できない表現が存在することは明らかになったが、どのような表現において、その能力が活用できないのかについて、より多くの表現を用いた調査によって、解明していく必要がある。さらに、今回の調査は、中国語母語話者のみを対象としており、他の言語を母語とする日本語学習者が対象の場合でも、同様の結果が表れるのかについても、調べるべきであろう。

**【参考文献】**

- 井下千以子（2002）『高等教育における文章表現教育に関する研究－大学教養教育と看護基礎教育に向けて－』風間書房
- 石黒圭（2004）『よくわかる文章表現の技術Ⅰ－表現・表記編－』明治書院
- 木下是雄（1990）『レポートの組み立て方』筑摩書房
- 国際交流基金・日本国際教育協会（1994）『日本語能力試験出題基準』凡人社
- 佐藤喜久雄（1994）『国際化・情報化社会へ向けての表現技術3「伝える」「考える」ための演習ノート』創拓社
- 静哲人（2007）『基礎から深く理解するラッシュモデリング：項目応答理論とは似て非なる測定のパラダイム』関西大学出版部
- 高橋正視（2002）『項目反応理論入門：新しい絶対評価』イデア出版局
- 田中舞（2010）「中国人日本語学習者の事実文・意見文に対する峻別能力の習得」『奈良産業大学 産業と経済 24-5』奈良産業大学, 21-35
- ブラウン J. D. (1999)、和田稔訳『言語テストの基礎知識』大修館書店
- Bond, Trevor G. & Fox Christine M. (2007) *Applying the Rasch Model: Fundamental Measurement in the Human Science Second Edition*, Lawrence Erlbaum Associates